スロイド教科の現状とその歴史(2)

オットー・サロモンとネース少年スロイド学校

名古屋大学教育発達科学研究科
横山　悦生

はじめに

前号では、スウェーデンのスロイド教科の現状と1878年の最初のスロイド教科の目的等について紹介した。今回は、スウェーデンのスロイド教科の歴史に大きな影響を与えたオットー・サロモンと彼がスロイド教育理論を形成していく際に土台となったネース少年スロイド学校についてとりあげる。その理由は、サロモンのスロイド教育理論についてはこれまでよく知られているが、それがどのようにして形成されたのかについてはサロモン自身がほとんど語ってこなかったこともあり、不明の部分が多いからである。本稿では、その形成過程について1891年にサロモンがネースのそれまでの歩みについてまとめた"Något om Näås och dess läroanstalter"という資料から関連部分を紹介し、若干の検討を加えたい[1]。

写真１　オットー・サロモン

１ サロモンの生育歴とネースへの移住

サロモン（Otto Salomon,1849-1907）は、ユダヤ人の両親のもとで1849年11月にイェーテボリ（Göteborg）で生まれた。当時としては、ユダヤ人はスウェーデンにとって最初の移民であった[2]。サロモンの父方の祖父にあたるBenjamin（ベンジャミン） Salomonと祖母Sophia（ソフィア） Nissen（ニッセン）は1780年代にドイツ北部（当時はプロシア）の町（Mecklenburg地方にあるGoldberg）からストックホルムに移住してきた。当時のスウェーデンでは、外国人に対する恐怖が一般的に存在した[3]。

ユダヤ人に許された経済活動は商業活動かギルドの規定に抵触しない手工業であった。サロモンの母方の祖父Aron Abrahamson（アローン アブラハムソン）はプロシアでは記章彫版工（medaljgravor）であったが[4]、1812年にスウェーデンに移住して以来、海運業者として働いていた。ユダヤ人の子どもがスウェーデンの学校に入学を許されたのは1859年、ユダヤ人が完全な市民権を得たのは1870年のことであった。サロモンは、14,15歳まではいくつかの私立学校で学び（7,8年間）、その後1864年にギムナシウム（"Högre Reallläroverket i Göteborg"）に入学し、1868年春には大学入学資格試験（mogenhetsexamen）に合格した。同年の秋学期からストックホルムにあるテクノロギスカ・インスティチュート（Teknologiska institutet ）の１年コースに入学した[5]。ところが、1869年2月に母方の叔父にあたるアブラハムソン（August Abrahamson,1817-1895）の妻が死亡し、その後親戚から叔父の所有地の管理を助けるように説得された。「長い思案の後に」テクノロギスカ・インスティチュートでの学習を継続することを断念し、1870年10月からウルツーナ・ラントブルーク・インスティチュート（ウルツーナ農科大学）において特別学生として1871年の夏まで学習した。その後サロモンは、イェーテボリから30キロメートル東に位置するネースへ移った。移住した直後から、サロモンはネース近郊の国民学校を訪問したり、Jenny Berg女史が子どものために設立した日曜学校で教えている。

2 ネース・スロイド学校の創設と初期のスロイド学校の教育

サロモンの叔父のアブラハムソンは当初、彼が住んでいる教区の学校委員会にスロイド学校を設立するための寄付の提供を申し出たが、その委員会はすでに設立されていた小学校（små skola）[6] の維持にその寄付を使用したいということで、スロイド学校を設立することには至らなかった。そこで、アブラハムソンは私立のスロイド学校として

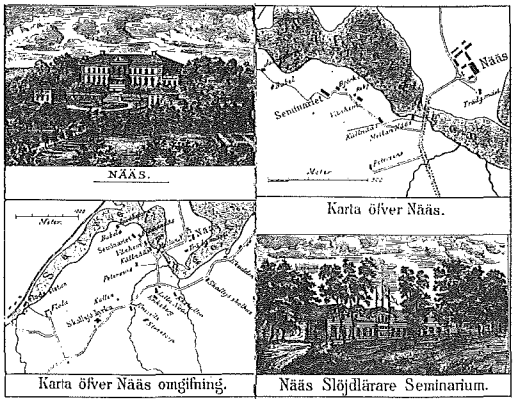

図1 ネース周辺の地図
左上はネース城、右下はネース・スロイド教員養成所の校舎

1872年2月に、ネースやその周辺に住んでいる国民学校（folkskola）を修了した男子を生徒として受け入れてネース少年スロイド学校（Nääs slöjdskola for gossar）を創設した。そのスロイド学校でとりあげられた教育内容は、数学、製図（linearritning）[7]、糸鋸（löfsågning）[8]であり、数学と製図はサロモンによって、糸鋸はスロイド・インストラクターであったボリエストローム（C.A.Borgström）によって担当された。1872年7月から実習設備を備えた新しい校舎が完成し、木工（snickeri）という科目が新たに実施された。この科目を担当したのは、アルフレッド・ヨハンソン（Alfred Johansson）で、彼は「農場のスロイダレ（slöjdare）の一人」であった[9]。最初の年のスロイドの授業で製作したものは、“くまで”と“荷車”であったという。学校の授業は毎日10時間ずつ、週6日間（月曜日から土曜日まで）、年間50週実施された。一日10時間のうち、7時間はスロイドの授業で、あとの3時間はその他の教科にあてられた。木工（snickeri）という科目には、次第に旋盤作業（svarvning）や彫刻（träsnideri）の内容が加えられた。また、一部の生徒のために馬鞍づくり（sadelmakeri）も加えられた。それに対して、糸鋸は最初の1年目で生徒に教えるのにあまり適切ではないという理由でとりあげられなくなった。生徒には当初補償金が1日につき40オーレが支払われた。それは、生徒の親[10]は義務教育を終えた子どもに勉強させる余裕がないことが判明したからであり、生徒が学校に来なくなると学校を閉鎖せざるをえないという判断からであった。しかし、次第にこの学校を卒業した生徒が比較的有利な仕事を獲得することができることによって世間の関心がもたれるようになってから、この補償金の制度は廃止された（1877年）。

先述したように、当初は国民学校を修了した生徒（13歳以上）を入学させていたが、「スロイド教育が基礎的であることが次第に明らかになってきたので、そしてそれが専門的教育の分野には含まれないことが明らかになってきたので、スロイド学校への入学者の年齢を下げる必要性がでてきた」。その結果として「スロイド学校への入学年齢が国民学校の上級段階[11]に入る子どもたちの平均年齢と同じになった」。そこで「理論的教科の授業の方も変化させる必要性がでてきた。」この変更は1874年に行われ、教科の構成は、キリスト教の知識、歴史と地理、算数と幾何、スウェーデン語、理科、清書、製図（linearritning）、軍事訓練となり、スロイドは木工（snickeri）、旋盤作業（svarvning）、彫刻（träsnideri）から構成された。さらに算数と幾何、製図（linearritning）は通常の国民学校よりも重視された。このスロイド学校は、

スロイドという科目を特徴とする国民学校に徐々に移行していった。

この資料によると「スウェーデンの教育的スロイド（svenska pedagogiska slöjdundervisning）の基礎にある思想がどのように実施されるか」を明らかにするための実験がこのスロイド学校の生徒を対象としてなされた。その実験の特徴の1つは、スロイドの授業でとりあげるスロイドの種類を一つかあるいは関連するものに限定することであった。1876年にはこの点でなされた試みの結果として木工（snickeri）に集中することのメリットが明確になったとサロモンは述べている。「理論的な観点からは、すべての学校の生徒に多様な種類のスロイドに関する知識と技能を獲得させることがメリットが大きいように考えられるが、実際にやってみると状況は異なったものとなった。すなわち、多様な教材への力の分散は、概して何らかの種類の技能とすべてに関するいい加減で、不十分な知識をもたらすこととなった。多くの種類の道具の使用は、道具の操作の確実な習得を妨げた。」木工（snickeri）のメリットは「生徒がのこぎり、かんな、ハンマーなどの日常生活でしばしば出会う道具を利用することになれること、木工工作台で立っている状態は、本や製図机で座っている状態との必要な交換になること、力を使うことを通して体力の発達を要求すること、木工以外のものよりも、木工の方が日常生活に役立つものをつくることができることにあった。

写真2　1906年の夏季コース（木工）の参加者
右端はオットー・サロモン、参加者はモデルシリーズ作品を手に

その実験のもう一つの特徴は、「実際に教育的な交換を引き起こすために、方法的に正しいやり方で（教授を）組織する」ことであった。その「教育的なスロイド教授」の方法は「職人の慣習的な養成方法とは異なる」とし、「慣習的な方法は道具の操作や接合等をそれだけ分離して取りだして学習させ、その後に実際の作品を製作する」方法（「前練習（förövning）」といわれる方法）であり、「抽象的なものから具体的なものへとすすんでいく」方法であるとしている。それに対して「教育的なスロイド教授」の方法は「まったく反対の方

法」であり、「具体的なものから抽象的なものへと進んでいく」とする。また、職人の養成では「最初の道具としてのこぎりから出発する」のに対して、「教育的なスロイド教授」ではナイフを「基本的な道具」とする。ナイフは「最も普通にある道具」で、「一般的な技能を獲得するのに適している」とする。そして、「このスロイダレに特徴的な道具であるナイフだけをつかって、使用可能なものをつくることができることも重要な点である」としている。

おわりに

本稿でみてきたように、ネース少年スロイド学校は発足して2年経過した1874年に入学年齢を11歳に下げて、国民学校としての性格をかねそなえたスロイド学校に変化した。この変化の要因をサロモンは「スロイド教育が基礎的であることが次第に明らかになってきたので」と述べていた。そして、この変化と同じ時期にスロイド教育の内容を木工に限定するという試みが始められた。年齢を下げたことと木工に限定したこととは相互に関連しているように考えられるが、この変化の要因の分析については今後の課題としたい。サロモンは従来の慣習的な職人の養成方法を批判していたことはすでにみてきた。サロモンの教育歴には職人になるための訓練経験はみられないが、サロモンの属する家系には職人（hantverkare）の系譜を確認できる。今回とりあげた資料("Något om Nääs och dess läroanstalter"）は1891年に書かれたもので、サロモンは「教育的スロイド」という言葉を使用しているが、この時期のスロイド学校のスロイド教育を「教育的スロイド」と定義できるかどうかはさらに検討されなければならない[12]。

以上2回にわたってスウェーデンのスロイド教科の現状と歴史(の一部)について述べてきた。スウェーデンのスロイド教科の最初の目的規定(男子)は、農民の日常生活にとって必要な技能を教えることを目的にしていた。本稿で紹介したように、サロモンが木工をとりあげたのは、農民が日常生活で出会う道具の使用法について習熟することによって日常生活に役立つものを生徒が製作でき、両親にその価値を認めさせることにあった。本稿でとりあげた時期のものは、サロモンが「教育的スロイド」として具体的な教材として編成した、モデル・シリーズが登場する以前の段階のものである。サロモンの1880年代から1890年代にかけての発展については、稿を改めて述べることにしたい。

注)

1)あわせて1876年にサロモンがネースのスロイド学校について書いた資料("Om Nääs slöjdskolor")も今回検討したが、スロイド学校については1891年の資料の方が詳しく紹介

されており、その資料の中で一部1876年の資料も引用されていた。なお、1876年の資料は同年に開催されたフィラデルフィア万国博覧会での展示に向けて書かれたものと考えられる。

2)スウェーデンに定住して、その営業に対する保証書を得るためには、最低限2000ダーレルの資本金が必要とされた。ダーレは当時のスウェーデンの貨幣単位で、当時の普通の労働者の賃金は年100ダーレル以下であった。つまり、裕福なユダヤ人だけが移民として歓迎された(Eva Helen Ulvros"Sophie Elkan" s.27, 2001)。

3)David Glück,Aron Neuman,Jacqueline Stare"Sveriges judar"1997

4)さらに彼の父親であるAron Isaacは印鑑彫版工(sigillgravören)であった。

5)後のTekniska högskolan(ストックホルム工科大学)

6)小学校(småskola)は2年あるいは3年制の学校で、その後に国民学校(その修業年限は小学校が2年の場合は国民学校は4年、3年の場合は3年であった)が続いた。当時の民衆教育は6年間(7−12歳)であった。小学校の教員は女性でsmåskolalärarinnaと呼ばれた。

7)製図(linearritning)はサロモンが重視していた教科の一つであった。サロモンはスロイドの技能(slöjdfärdighet)は製図の技能(ritfärdighet)に支えられるとし、このスロイド学校では週に9時間を製図にあてていた("Något om Nääs och dess läroanstalter"s.27)。また、サロモンは1876年に"Kortfattad handledning i linearritning"(製図のための手引き)を出版している。

8)糸鋸(lofsagning)は当時スウェーデンにおいて流行し始めていたとサロモンは書いている("Något om Nääs och dess läroanstalter"s.13)

9)このスロイダレ(slöjdare)というのは、スロイドをおこなう人といいかえることができるが、"Ordbok över Svenska Språket utgiven av Svenska Akademien"(第28巻)という辞典によれば、この1800年頃から1900頃にかけては、スタータレ(statare、農場労働者)と同じように農場に雇用された労働者であるが、農場に必要なものを製作するということで、少し高い賃金を得ていた人をさす言葉であった。

10)サロモンは「労働者階級(kroppsarbetarnes klass)の親」と表現しているが、スタータレ(農場労働者)をさしていると考えられる。

11)上級段階とは小学校を1, 2(3)学年として5学年と6学年に相当する部分であり、11歳と12歳の年齢段階にあたる。

12)サロモンは1891年の資料で、「この考え方(本稿で紹介した内容をさす—引用者)で作成されたモデル・シリーズは1877年に初めて公開され、エルフスボリエ県のスロイド展覧会において賞を授与された」("Något om Nääs och dess läroanstalter"s.27)としている。筆者が確認できるサロモンの教育的スロイドの「モデルシリーズ」は1880年代前半以降のものであり、この1877年のモデル・シリーズはまだ確認されていない。